

呼び声

著／市川憂人



1

震えながら受話器を掴む。通話口を押し当てると、いつもと同じくぐもった声が、理美の耳をぞろりと舐め上げた。

——、——……。
身体が強張る。

相槌を打つことも遮ることも出来ず、ただじっと、暗い部屋の隅で受話器を握り締める。

通話口の声が途切れる。理美は喉の奥から返事を搾り出した。

「……何を……すれば……いいの……？」

——……。……。

「そんな——」

——、——……。

「だめ、できない——」

——……。……。

ああ——理美の顔が歪んだ。受話器をそっと畳に横たえ、卓袱台の上の、掌ほどの丸い容器に手を伸ばす。

歯の根がかみ合わない。蓋を開ける指の震えが止まらない。

ようやくのことで蓋を開き、容器の中の軟膏を右手の指先に掏い取った。左手を下に差し伸べ、人差し指と中指でそつとそこを開く。

空調機の据えた風が髪を颯り、叢を撫ぜる。畳のささくれが臀部を刺す。

左手で開いたまま、理美は右手指の軟膏をそこに触れさせた。

身体が震えた。

喘ぎを堪えながら軟膏を塗り込めていく。脚をさらに大きく広げ、左手の指をいっぱいには開き、喉を小刻みに上下させながら、理美は軟膏をもう一度掏い取り、奥深くまで滑らせた。身体中から汗が噴き出し、固く張った胸の谷間を滑り落ち

た。

身体の震えが止まらない。吐息の乱れが収まらない。膝を擦り合わせながら理美は畳の受話器を掴み、長い無言の果てに吐き出した。

「……次は……何を」

すればいいの——後の言葉を続けようとしたその時、理美の身体が硬直した。

……ああ……ああ……ああ……。

膝を擦り合わせる動きが激しくなった。剥き出しの胸を揺らし、臀部を畳に擦り付けながら、首を左右に振り回す。

「——何を、何をすればいいの。早く、早く——」

——……。……。

顔が青ざめた。

「どうして!? ひどい、そんなの——」

恨みを込めたはずのその声は、しかしそこから広がる感覚に蕩かされ、甘えたような響きにしかならなかった。

「……いや……だめ……だめ……」

指が白くなるほどに受話器を握り締め、全身を激しく揺さぶる。前髪を額に貼り付けたまま、理美は狂おしく壁の時計を凝視した。

一分——二分——二分半——三分——
三分十五秒——

ねっとりとはばりついたように、時間の流れが遅い。

……早く……はやく……はやく……

秒針が十周回る頃、理美の口から弾けるように嗚咽がほどばしった。

「ゆるして……おねがい……もう……もう……ゆるして……」

……

呼び声

向、こ、うの言葉が終わるのも待てなかった。受話器を片手で握ったままもう一方の手を伸ばし、力任せに軟膏を搦う。上体をうつぶせに倒し、頬を横向きに畳に押し付ける。脚の付け根を浮かせ、軟膏を搦った指を後ろのもうひとつの個所に

くぐらせる。

受話器を口元に寝かせると、理美は片手を前に潜り込ませ、固く張り詰めた胸の先端を畳に擦り付けた。前後に回した手の動きに合わせて腰を揺さぶり、受話器に向かって絶叫を放った。

2

「——水越さん」

はっと顔を上げると、山根圭吾が眉根をしかめながらこちらを見下ろしていた。

「大丈夫ですか。風邪、まだ直ってないんですか」

「……何でもないわ。もう平気だから。気にしないで」

「無理しない方がいいですよ。まだ納期には余裕ありますし」

「ありがと。大丈夫」

理美の派遣先は、日によって仕事量にばらつきが大きい。評価用サンプルが何

本当に無理しないで下さいよ。圭吾は笑うと、お先に失礼しますと言いつつ残して帰って行った。

時計を見上げる。午後七時三十七分。がらんとした検査室の中、残っているのは理美ひとりだけだ。

スタッフも今日は全員引き上げている。誰かの送別会とかで、定時を過ぎた頃には執務室には入っ子ひとり居なくなっていた。

壁ひとつ向こうで、冷却水循環装置のポンプが唸り声を挙げている。

知れず、理美は吐息を漏らした。先程の圭吾の怪訝な表情が脳裏をよぎった。

……無理をしてくるわけじゃない。アパートに戻ったところで、眠るまでの時間を怯えながら過ごすだけだ。少なくともここにいる間はあの電話を取らずにいられる。

始まりはいつだったのか。

三ヶ月前？ 半年前？ それとも一年

呼び声

前？ 思い出せない。以前の相手に捨てられた後、何を遊び回るでもなく、ただ職場と部屋を往復するだけの、虚しくも穏やかなはずだった理美の日々は今、暗い深海を漂ったままだ。

気付かれなかっただろうか、怪しまれていないだろうか。最近の理美の「体調不良」は圭吾にはつきり認識されてしまっている。こんな毎日が続けば、いずれ全て露呈してしまうのは目に見えている。

彼にだけは知られたくない。知られてはならない、決して。

でも、どうすればいいのか。解らない。自分がどうなってしまうのかさえ全く見えない。

モニタに映し出されるスペクトルを眺めながら、理美はもう一度重い息を吐いた。

今の自分に見えるのは、今この瞬間だけ。測定が終わるまであと二十分。解析

も出て来ず、ほとんど測定室の整理や掃除だけで終わってしまう日もあれば、サンプルが立て込んで帰宅が夜八時を過ぎる時もある。もっと均等にならないのだろうかと理美はいつも思うのだが、評価を依頼してくる研究員の方も、突発の顧客対応やら再実験やら何やらで、サンプル量を完全にコントロールできる訳ではないらしい。

X線回折装置^{XR}に向き直る。規制緩和云々の影響なのかどうか、今はどの企業でも、こういう日常作業的な検査業務は正規の研究員でなく派遣社員の仕事になっている——ということを理美が知ったのは最近だ。スタッフは理美たち検査員の出すデータを見て、次のサンプルの製造条件に折り返す。今回は圭吾の言う通りまだ納期に余裕はあったが、検査の遅れが研究全体の遅延に繋がる以上、あまりだからだと作業する訳にもいかなかった。

にもう二十分ほど。それまではここに居られる。部屋に帰らなくて済む。

部屋に戻って、電話が鳴ったら——鳴ったら——

電話が鳴った。

背中が跳ねた。

測定機器の並ぶ検査室。二十畳ほどの広い部屋の中央に、検査員の業務用の机が並べられている。その机の上のコードレス電話が、人気の失せた検査室の中、場違いに明るい電子音を響かせていた。

短い音が続けて三回、間を置いて三回、さらに三回……外線だ。

誰が来て来ているのか。今、ここに残っているのは理美だけだ。こんな時間帯に、しかもスタッフの執務室でなく検査室に直接、外線が入っている。

——まさか？

馬鹿な、そんな馬鹿な。考え過ぎだ。

こんな所にまでなんてこと、あるわけがない。

呼出音は鳴り続けている。恐る恐る手を伸ばし、理美は受話器を取った。

「……はい」

『ああ、水越さん？ 山根ですけど』

緊張が解けた。

「何だ、君か……おどかさないですよ」

『え？ 何がですか』

あ——

「誰も居ない部屋に突然電話をかけるな、ってこと」

『無茶言わないで下さいよ』

怖がりだなあ、電話越しに圭吾の笑い声が聞こえた。……不審に感じている様子は無い。理美は胸を撫で下ろしながら、

「それで、どうしたの？」

『あ、いえ。大した用事じゃないんですけど——段差測定装置の電源、落ちてます？ ちゃんと立ち下げたかどうかど忘れしてて』

「ちょっと待って」

コードレスの受話器を持ったまま、理美は部屋の奥に歩み寄り、嵌め殺しのガラス窓越しに隣室を覗き込んだ。

照明の落とされたクリンルーム。その中央辺りで、パソコンのモニターがひとつ、淡い光を放っていた。

「PCが点いたままになってるけど」

あっちゃー、圭吾の嘆きが聞こえた。

『水越さん、申し訳ないんですけど、電源切っておいていただけます？』

「了解」

クリンウェアに着替えて中に入ってPCをいじるだけだ。十分もあれば片付く。

『すみません、お願いします』

頭を下げる圭吾の姿が見えるようだ。

『……あの、水越さん』

「何？」

『頼み事しといて言うのも変ですけど、その……あまり無理しないで下さいね。』

きない……」

——、……。『……そんな……』

長い無言の後、理美は力尽きたように首を折った。

誰かが戻ってくる気配は無い。ポンプの稼働音、そしてX線管球から放たれる高周波音が、蛍光灯に照らされた検査室の中を虚ろに響いている。

受話器を左手に持ったまま、理美は操られたように、作業着のジッパーを引き下ろした。作業服の前をだけさせ、両袖のマジックテープを外し、左腕、右腕と交互に引き抜く。

Tシャツだけになった理美の上半身を、エアコンの風が撫でた。

上着を椅子の背もたれに掛け、受話器を机の上に置き、理美は震える手でTシャツの裾を挿んだ。数十秒の沈黙。眼を固く閉じ、理美は裾を引き上げ、頭から抜き取った。

もう、夜も遅いですし』

「解ったわ。ありがと」

それじゃ、後をお願いします——そう言い置いて圭吾は電話を切った。

気のせいだろうか、やけに慌しい切り方だった。最後の方も妙にしどろもどろしていた。自分に雑用を押し付けるのを、それほど気に病んでいたのだろうか。

……気にしてなんか欲しくないのに。理美は受話器を元に戻した。

XRDの測定終了まではまだ間がある。段差測定装置の立ち下げくらいなら、この間に済ませられるだろう。クリンルームの更衣室へ一歩を踏み出して、再び電話が鳴った。

細切れの呼出音が三回。三回、三回……また外線だ。

圭吾だろうか。他に忘れ事でもあったのだろうか？ 理美は引き返して受話器を持ち上げた。

「山根くん？ また何か——」

受話器を掴み直し、乱れていく呼吸を受話器の向こうに聞かせながら、片手を背中中に回し、ホックを外した。

ぱさり、足元に衣ずれの音が響く。胸元に空気の流れを感じた。作業着のズボンのジッパーを摘み、息を止めて下ろすボタンを外し、裾に手を掛け、前屈み気味にズボンを下げる。

足首辺りまで落とし、右足と左足を引き抜く。

「……お願い、これ以上は、これ以上は……」

——、……。顔に血液が逆流する。

瞳を潤ませ、唇を強く噛み締めながら、理美は最後の一枚に指を掛けた。荒れる呼吸を静めるように何度も息を吸い、吐く。

そして息を止め、下ろした。叢の揺れる感触に、全身が一気に発火した。

足首から抜き取る。目の前が、暗黒から薄い赤色に塗り替えられていく。

指を伸ばし、触れる。重みを増した叢が指先にまとわり付く。

「……そんなこと、言えない……」

脳裏が真紅に染まる。立ったまま脚を開き、左手の受話器を下腹部に近付ける。

右手の人差し指と薬指とでそこを広げると、理美は中指を潜らせた。

先程より大きな水音が立った。喘ぎが空調の風に乗って、検査室の中を満たす。

もう何も考えられなかった。

冷えたりノリウムの床に仰向けに倒れ込み、脚をさらに大きく広げ、受話器をそこに押し付けながら、機械に囲まれた検査室の中、理美は右手の指で装のあわいと尖りを齧り、喘ぎを撒き散らし続けた。

呼び声

……どれほど過ぎたのだろうか。

理美はのろのろと身体を起こした。XRDの測定は終わっていた。

視線を落とす。受話器と床の表面にぬめりが広がっていた。激しい火照りが全身を走る。机の上から器具掃除用のガーズを取り、受話器と床とそこを拭う。手洗いの時と違う感触に、身体が小さく震える。

緩慢に受話器を耳に当てる。待ち構えたように、雑音に似た声が耳朶に染み渡った。

「……言わないで……」

「そ、そんなこと……」

震える理美の声に力は無かった。亡霊のように立ち上がり、脱ぎ捨てた衣服を置き捨て、クリーンルームの更衣室に向かった。

——七分後、理美はクリーンルームの中にいた。

クリーンウェアは身に着けている。頭の先から爪先までを、装飾性の欠片もない白い樹脂が包み込んでいる。しかし肌に直接触れるその冷たい感触は、普段の作業着越しの窮屈さとはまるで違っていた。

着衣の状態を確認するための姿見が、エアシャワー室の扉の横に据え付けられている。その姿見の中に、身体のラインと胸の先端と下腹部の叢が、クリーンウェアの薄い生地を透かしてぼんやりと浮かび上がっていた。

……寒い。

クリーンルームの室温は、外の検査室のそれより数度低く設定されている。真夏の通常作業時でさえ、数時間籠ると手が凍えるほどだ。

姿見から目を背けると、理美は段差測定装置に歩み寄り、電源を落とした。圭

呼吸

吾から頼まれた用件は簡単に終わった。だが、まだ戻れない。コードレスの受話器から漏れる声が、理美を幾重にも縛り付けている。

「……どういう、こと……?」

疑問を投げたところで逆らう術など無い。クリーンウェアだけを纏った姿のまま、理美はドラフトに歩み寄った。中に伏せ置かれたテフロンピーカーに手を伸ばし、ドラフト正面のハンドルを捻る。蛇口から純水が流れ出す。

テフロンピーカーに純水を半分だけ満たすと、理美はそろそろと口元に運び、中の水を喉に流し込んだ。

ピーカーは洗浄してある。水もイオン交換された超純水だ。毒物が身体に入る恐れは無い。中身を空にすると、理美は再びピーカーに水を汲み、飲み干した。

ピーカー三杯半の水が胃の中に入った。限界だった。

「もう……これ以上、飲めない……」

ピーカーを濯いで元に戻し、蛇口のハンドルを閉める。そのまま時間が過ぎた。五分、十分、十五分……午後八時はどうに過ぎていく。

胃の中の水分が内臓を冷やす。効き過ぎる程に効かされた空調が、理美の体温を奪っていく。

悪寒が全身にまとわり付いた。知らず、理美は膝を擦り合わせていた。

……あ……

意識し始めた途端、急激に感覚がせり上がった。身体の内から迫ってくるその感覚が、幾秒もしないうちに理美の全身に溢れ返った。

喘ぎが漏れた。理美は歯の根を震わせながら、

「お願い、終わりにして……もう、その……」

「……そんな……」

血の気が引いた。感覚が加速度的に、耐えられない程に膨らんでいった。全身を悪寒が走る。両の太腿が激しく擦り合わさる。腰が左右に揺れ、絶え間ない衝動が理美を突き上げた。

……ああ、ああ、ああ……

「だめ、もう、だめ……お願い、お願い、お願い……!」

髪を振り乱し、全身をばたつかせながら叫ぶ。頬を涙が伝う。胸の先端がクリーンウェアの生地に擦れ、新たな感覚を呼び起こす。

「……!」

「いやっ……そんなことしたら……そんなことしたら……!」

「……ひどい、ひどい……」

嗚咽を挙げながら、理美は右手を下に差し伸べた。力を抜かないよう懸命に堪

え、両の膝を引き離す。クリーンウェアの上から中指を添える。

目を固く閉じ、深くなぞった。激しい震えが全身を駆け抜ける。そのまま憑かれたようになぞり続けた。引き裂かれるような疾走感と衝動が駆け抜けた。

「もう……もう……もう……」

歯を噛み締めながら動かし続けた。中指が滑り、ウェア越しに尖りの上を過ぎた。

瞬間、理美の全身が硬直した。

——弾けた。

奥底から湧き上がっていた感覚が身体を押し破り、一気に溢れた。

脈動が音を立ててクリーンウェアの裏側を叩く。温かい感触が腿から膝へ、ふくらはぎへ駆け下りる。いつ途切れるとも知らない流れが樹脂製の生地に染み、太腿に張り付いていく。

……ああああ……ああああ……燃えるような羞恥と開放感に包まれる

がら、理美はあごを逸らし、腰を突き上げ、嗚咽を漏らし続けた。

3

……目を覚ます。

カーテンの隙間から薄ぼんやりと光が漏れている。アパートの自室だった。

あれからどうやってここに戻ってきたのか。臆げな記憶しか残っていない。サンプルは外しただろうか。×練回折装置は落としただろうか。クリーンルームの床は、クリーンウェアは……

薄紅色の渦が脳裏を巻いた。

起き上がる。畳の上に昨日の衣服が散らばっている。ブラウス、スカート、靴下、下着……胸元から下腹部に視線を落とし、視界がさらに紅く染まった。

結局、昨夜もあれだけでは終わらなかった。部屋に帰り着いた直後、狙い済ましたように電話機が鳴った。何を命じ

されていた。

——タイル張りの浴室の壁に身を寄りかからせ、脚を広げ、片手で左胸を掴み、片手を脚の間に添え、顎を心持ち上げ、目を半閉じにしながら、何かを叫ぶように口を開けるひとりの女。

どこから撮られていたのか、画像は驚くほど鮮明だ。額に光る汗も、胸の突起を押し潰す指先も、広げられた下の唇の皺も、内腿を伝う流れも——感覚の虜になった虚ろな表情も、はっきりと確認できる。

血が滲むほど唇を噛んだ。

画像の下の空白に、味気無い明朝体で、今回の命令が印字されていた。それを視線で三度追った後、理美は紙を半分に裂き、封筒ごと丸め、目を背けながら台所の脇のごみ箱に放り込んだ。

奥の間へ戻り、パジャマを脱ぐ。ブラスチック製の収納ケースからTシャツを取り出し、纏う。

ケースの上に置かれた紙製の小箱から、卵状ののっぺりした物体を積み上げる。

息を整え、左手の指で広げながら、理美は唇を噛んだまま、卵をゆっくり沈めていった。

※

昼休み開始のベルが鳴った。

他の検査員がひとり、またひとりと席を立ち、昼食に向かっていく。×練回折装置の前に座る理美の背後から、いつもと同じ穏やかな声が進み寄ってきた。

「まだ終わらないんですか水越さん。弁当、冷めますよ」

「……うん。これが済んだら行くから」

理美たち派遣社員はいつも、社員食堂でなく階下のプレハブの休憩室で昼食を摂っている。弁当は、あらかじめ注文しておいて業者が毎日運んでくる仕組みだ。派遣社員は社員食堂を利用できない――

られ、どんな格好でどんなことをさせられたのか、もう記憶に残っていない。

散らばった衣類を洗濯籠に投げ入れた。部屋の隅のパジャマを拾い上げ、素肌の上から身に着ける。

チェーンを外し、ドアを開けた。部屋は一階、アパートの玄関横の郵便受けまでは十数歩だ。

他の部屋から出てくる者も、目の前の道を歩く者も無い。住人は自分ひとり。いつ取り壊されてもおかしくないような老朽化したアパートだった。

郵便受けの中を探ると、切手も貼られていない真っ白な封筒が一封、いつものように放り込まれていた。

封筒を握り締め、周囲を見渡し、足早に自室に戻る。チェーンを掛け、封筒を破ると、折り畳まれた一枚の紙が中から滑り落ちた。

A4サイズの中央に、何度見ても見慣れることの出来ない、一枚の画像が印刷

——という規則があるのかどうか理美は知らない。この職場に配属された時から、こういうシステムだ。隔離政策の一環なのかどうかは解らないが、かと言って不満があるわけでも無かった。片道十分の手間をかけて工場の反対側の社員食堂へ行くよりは、遥かに楽だ。

「——水越さん」

圭吾の声が不意に硬くなった。

思わず振り返る。圭吾は真剣な表情で理美を見つめていた。心臓が軽く跳ねた。

「あの、本当に無理しないで下さいよ。昨日も遅かったじゃないですか」

「……大丈夫。夕べは終夜運転にしてすぐ帰ったから。今、その分の解析をやってるだけ」

結局、朝来てみたら、×練回折装置もサンプルもそのままになっていた。忙しい時、XRDのサンプルを測定にかけて状態が帰宅するのは茶飯事だ。疑われる心配は無いと解ってはいたが、それでも

気は落ち着かない。

クリーンルームには痕跡は残っていない
かった。あの後の自分の行動を、理美は
ようやく思い出した——午前中の間、逃げ
出したかと思いで一杯だった。

主吾の視線から顔を逸らし、理美はモ
ニタに向き直った。

お願い……そんな目で見ないで。
朝からずっと振り払おうとして振り払
えなかった下腹部の奥の違和感が、急激
に増していく。

目を落とすと、脇のごみ箱に昨夜の
ガゼが捨てられたままになっていた。
胸が破裂しそうなほど脈打つ。

短い無言の後、主吾の溜息が聞こえた。
「……じゃ、先に下りてます」

何か言いかける気配がしたものの、主
吾は結局何も言わず、検査室を出て行っ
た。

呼び声

気が付けば、検査室には人氣が無く
なっていた。

囁

と見たな。どれどれ、吾輩が鍛え直して
進ぜようか」

「あ、だったら私も。どう今夜？ お姉
さんと極上の一夜を共にしない？」

「遠慮します。大体、お二方ともちゃん
とお相手がいるんじゃないですか」

あはは、能天気な笑いが扉越しに響い
た。

「まあそんなだけだね。色々あるのよ
付き合いが長くなると。解る？」

「どうか山根くん、振られたって言っ
たけど、今は付き合ってる人とかいない
の？ じゃなければ気になる人とか」

「……いませんよ」

主吾の返答に、一瞬の間があった。

「んんっ？ 本当かなあ？ 匂うなあ」

「あ、解った。もしかして採取の水越ちゃ
んとか？」

心臓が高く音を立てた。

「だから、違いますって」

「あ、頬をほんのり赤らめていますよこの

……自分は何をやっているのだろう。
理美は臉を拭った。

数十分後、ろくに解析も進められない
まま階下へ下り、裏口から外へ出ると、
休憩室のドアの内側から話し声が聞こえ
た。

「山根くんってさ、絶対二股とかかけて
そうだよねー」

「見える見える」

思わず足を止める。

全数検査班の女の子達の声だった。顔
を思い出せる程度には知っているが、あ
まり話したことはない。同じ建物内でも、
全数班は一階、理美たち採取班は二階、
と仕事場が違う。自然とふたつの班は疎
遠になりがちなのだが——理美と同じ採
取班の主吾を語る彼女達の声は、明るず
がるほどに明るかった。

足を動かさないうまま佇んでいると、
「どういう意味ですか、それは」

人。凶星か？」

「初心^{ウツ}なんだから全く。なるほどねえ。

派遣のアイドル山根くんが水越さんを
ねえ」

「違うって言うてるじゃないですか」

主吾の声色は普段と同じ調子で、彼女
達の言葉が事実を言い当てたものなの
か、からかっているだけなのかは解らな
い。だが、理美の胸を暴露させるには充
分だった。

主吾が自分を——自分を？

「ま、それじゃ、そういうことにしてい
てあげるとして——」

女の子の片割れの声が、不意に真剣味
を帯びた。

「止めといた方がいいよ、水越さんは」

「うん——私もそう思う」

背中が静かに凍り付いた。

「……どういう意味ですか」

やれやれと言わんばかりの主吾の声が、
中から響いてきて、理美は飛び上がりそ
うになった。

三人の他に気配は無い。十二時も半分
を過ぎようとしている。他の検査員はど
うに昼食を済ませてどこかへ行ってし
まったようだった。

「だってさほら。いかにも『泣かせた女
は数知れねえぜ』って顔してるじゃない。
あ、もちろんいい意味で、だけど」

「実際のところどうなのさ。うりうり、
お姉さん達に白状しなさいてば」

「止めてくださいよ、もう」

溜息。「そりゃ、恋愛経験は無いでも
ないですけど、数知れずなんてレベルに
は程遠いですよ。第一泣かせたことなん
か全くありません。むしろ泣かされてば
かりです。前の彼女にもあっさり振られ
ましたし」

「ありゃ、そうなの？ 意外ー」

「……というかお主、実は相当のヘタレ

「いや、さ。ひとのことあんまり悪く言
いたくないけど……実は、良くない噂が
あるの」

「確かに、山根くんが気にするのも解る
よ。水越ちゃん綺麗だし、スタイルも悪
くないし、性格もまあ、ちょっと暗いか
なあってどこあるけど、人当たりはいいし、
仕事してる分には全然優秀だと思うし。
……でも、さ」

「だから、何なんですか」

主吾の声が、初めて苛立ちを帯びた—
—ような気がした。

十数秒の間。

「……テレクラしてる、って噂あるの。
彼女」

胃の中を、鉛色の何かが落ちていった。

「その手の雑誌に、水越ちゃんの顔写真
が載ったことがあったんだって。声も
割とそっくりらしいって」

「現に水越さん、何かいつも疲れたような顔してるでしょ？ 夜にさ、さういことしてるからだって、全数班の男共が話してたのを聞いた事あるよ」

「仕事終わった後も、うちらと一緒に呑んだり遊んだりって全然しないですよ、水越ちゃん？ いつも最後まで残業してるか、さっさと帰っちゃうかのどちらかじゃない。派遣の送別会も忘年会も、ずっとご無沙汰だしさ。家に帰って何してるのか全然解らないもの」

「それに、男共が言ってたけど、水越さんのとこに夜電話かけても絶対繋がらないんだって。何か怪しくない？」

最初の前置きとは裏腹に、最後は誹謗中傷以外の何物でもなくなっていた。

胸の上の両手が激しく震えた。今すぐ扉を開けて、中の彼女達を血が出るほど叩きたい衝動に襲われた。

違う、違う。自分はそんな人間じゃない。そんな女なんかじゃない。そんな淫

「お、お願い、そんなにむきにならないで。ごめん、謝る。私達が悪かったから、」

「——失礼します」

立ち上がる気配がした。

全力で踵を返した。裏口から本館に滑り込むのと、背中から休憩室の扉の音が響くのが同時だった。

解っていた。自分はそういう人間なのだ。こんなことになったのだから自業自得じゃないか。以前の相手に捨てられた後、身体の奥底から湧き上がる囁きに負けて、浴室であんなことをして、それを写真に、写真に——

涙を堪えながら、何でも振り回しようとして——歩を進めるたびに、下腹部から甘い感覚が責め立てた。

……あ、あ、あ——

「水越さん！」

足が止まった。

「……何、山根くん？」

なるべく自然に振り返ったつもりだっ

らな女なんかじゃ——

唐突に衝動が止んだ。

……何が違うというのか。

毎夜毎晩、顔も見せない相手の声を電

話越しに聞きながら、決して人に見せられない恥ずかしい格好で悶え、喘いでいるのはどこの誰だというのか。

つい昨日、あるうことか二階の職場で、あんな痴態を演じたのは誰だ。

今朝からずっと、今もこの場で、人には言えない器具を入れて、下着に溢れさせながら震えている自分は、いったい何だというのか。

こんな自分をもし圭吾に知られたら、いったい何と言いつればいいのか。脅されたから？ 顔も見ない相手に電話で命じられたから？ 言えない。言えるわけない。そんなのテレクラと同じじゃないか。

そうだ。彼女達の言った事の、どこが嘘だというのか。昼間から疲れているの

たが、圭吾の顔にはいぶかしげな表情が浮かんでいた。

「どこ行くんですか」

「どこ……って、階上よ。もう、お昼休

みも終わっちゃうでしょ」

「お昼ご飯は？ まだ弁当取りに行っていないですよ」

「……間違えて、自分でお弁当作って来ちゃったの。ドジね、君の言う通り、少し休んだ方がいいのかな……」

冗談交じりの照れ笑い、のつもりだった。

理美の顔を覗き込まんばかりに近づけていた圭吾は、瞬間、はっと表情を変えた。

「——まさか、聞いてたんですか」

「何の、こと」

「……聞いてたんですね」

圭吾は視線を落とし、しかし数秒後に固い口調で向き直った。「水越さん、あんな人達の言うことなんか気にしちゃ駄目だ。俺は絶対信じません。信じたりし

は、夜に仕事仲間を避けているのは、電話が繋がらないのは、いったいどうしてだ？

「——いい加減にしてください」

圭吾の声が、今度は明らかな怒気を孕んでいた。「何か証拠でもあるんですか、今の話に」

女の子達の声が、急にうるたえたものに変った。

「いや、その、だから。さっきの話はその、ただの噂で——」

「私達もその、全然信じてるわけじゃないんだってば。み、水越ちゃんがそんなことしてる訳ないじゃない。だからほら、山根くん、落ち着いて、」

「さっき『水越さんはやめた方がいい』と仰ったのはどなた達ですか」

女の子二人の声がびたりと止まった。

「……先程の話をお二方が教えてくれた、ということはお覚えていますか」

「や、山根くん！」

俺、ここに来てまだ半年も経っていない。あんな酷い噂を平気で喋る人達のことなんか。

俺、ここに来てまだ半年も経っていない。水越さんの事も良く知っていると云えないけど、少なくともあんな人達よりはよっぽど、水越さんを解ってるつもりです。その——ずっと、見てきたから。

だから、その、噂なんて気にしないで下さい。俺、水越さんの味方ですから」

圭吾の言葉が、理美をゆるやかに奈落へ突き落とした。

圭吾は、そういう女を心の底から軽蔑している。理美がそんな人間ではないと信じ込んでいる。

彼に真実を知られたら。知られてしまったら、自分は——

圭吾が理美の両肩を掴んだ。

「……水越さん、俺、」

「だめ、山根くん——」

廊下には誰も見えない。先程の女の子二人も追ってくる気配は無い。圭吾の身

体がゆっくりり迫って来た。何もかも投げ出してしまいたくなって、臉を――

何の前触れも無く、卵が振動を開始した。

背骨を衝撃が突き抜けた。声を挙げずにいられたのは奇跡だった。

……あ……いや……あ、あ……あああ……あ……。

「水越さん――？」

「……や、山根、くん……だめ……だめなの……だめっ！」

声を震わせながら圭吾を押し退け、理美は逃げるように駆け出した。

「水越さん!」

圭吾の声が背中に突き刺さる。

――どうして?! どうして?!

呼び声

角を曲がる。女子トイレへ飛び込む。誰も入っていない。スリッパに履き替えるのもどかしく、個室へ入って鍵をか

りを違和感が包む。圧迫された下腹部の奥で、卵がさらに激しく震えている。

目を落とす。叢が透けていた。頬に血を上らせながら、理美は下着越しに指を当て、擦った。

さほど時間もかからなかった。

PHSを握った手で口を押さえ、理美は座ったまま背中をのけぞらせ――数秒後、下着の繊維の隙間から堪え切れなかったものが滲み出し、一部が弧を描いて溢れ出した。

便器の手前奥の水溜めに音が立つ。後ろの部分にまで染み渡っていく感触に、理美は何度も身を震わせた。

4

……トイレトーパーで出来る限り吸い取っても、ズボンを着いても、腰にまとわり付く冷たい違和感は消えてくれなかった。

ける。

計ったように上着の胸ポケットの業務用PHSが鳴り出した。卵は震え続けている。誰、誰!? 喉を突き上げる喘ぎを懸命に堪えながら、理美はPHSを繋いだ。

……。
灰色にくぐもったあの声が、PHSから滲み出した。

「――っ! ど、どうして……」

社内業務用のPHSへは、外線からも直接ダイヤル出来る。抜取検査室の電話にまで掛けてきた相手が業務用PHSに掛けられないはずがないと、頭では理解していたが、それでも問わずにいられたかった。

――……。――。

「……いや……とめて……おねがい……とめて……」
唇を震わせ、腰を揺すりながら懇願す

卵の振動は止んでいた。今は下にずり落ちて来て、唇を少し押し広げたところで下着に押さえられていた。

歩き方がぎこちなくなるのをどうしようもなかった。スリッパを履き替え、女子トイレを出る。昼休み終了のベルが鳴った。廊下を社員が何人が通り過ぎていった。

圭吾の姿はなかった。唇を噛み締め、涙と、下腹部の冷たい感覚を堪えながら、理美は階段を登った。

二階に上がると、理美は検査室には直接戻らず、女子更衣室に入った。

この時間、ここを利用する人間は減多にいない。更衣室の扉を閉め、理美は自分のロッカーの前に佇んだ。

今はまだ、誰とも――特に圭吾とは、顔を合わせられなかった。かと言っていつまでもトイレに籠もっているのにも、強い抵抗と羞恥がある。子供じみた行為と解ってはいたが、今は、誰もいないと

る。返って来たのはしかし声ではなく、さらに大きな懲罰だった。

卵の振動が激しさを増した。

悲鳴が漏れた。慌てて片手で口を塞ぐ。指の隙間から嗚咽が噴き出る。

外の廊下を誰かが近付く気配がする。冷たい汗が背中を伝う。お願い、入って来ないで、入って来ないで……お願いが通じたのか、足音は女子トイレの横を通り過ぎる。

「……やめて……やめて……もう、やめて……」

ぶるぶると首を振る。だが逆らうことなど出来ない。昨日と同じように、理美は腰に手を伸ばし、作業着のズボンのジッパーを下ろした。裾を掴み、眩暈を堪えながら引き下ろす。

下着は穿いたまま、ズボンだけを膝に絡ませた格好で、理美は和式便器に腰を落とした。普段と違う脱ぎ方に、腰の周

ころで少しでもいいから気持ちを落ち着けたかった。

……自分は、圭吾を裏切っている。つい数十分前のあの女の子二人への、そして自分への圭吾の言葉。色恋事に長けているとは言えない自分にも、圭吾が自分にどんな感情を抱いてくれているのか、充分過ぎるくらい理解できた。

嬉しかった。何よりも望んでいたことのはずだった。

なのに、自分は圭吾を拒絶した。望んだ行為ではない。だがあの時の自分の態度は、誰がどう見ても圭吾を突き放したようにしか思わないだろう。

……どうすれば……どうすればいいの。謝ったところで、圭吾が赦してくれるかどうか解らない。赦してくれたところで、自分が今も彼を欺いていることに変わりはない。こんな自分に、いったい何を望む資格があるというのか。

今は静かに佇む卵の感覚が、恨めしい

🌀

ほどの甘やかさで再び理美を苛んだ。作業着のズボンへ手が伸びて——

その時初めて、自分のロッカーの扉の隙間に、白い何かが挟まっているのに気付いた。

封筒だった。

今朝、アパートの郵便受けに入っていたものに似た、味も素っ気もない封筒。

背中を薄ら寒いものが通った。震える手で隙間から引っ張り出す。

周囲を見る。誰もいない。糊付けもされてない封入口を開き、中から折り畳まれた上質紙を取り出し、広げ——絶叫を放った。

昨夜の理美が印刷されていた。

——リノリウムの床の上、胸の頂点を尖らせ、これ以上ないほど脚を広げ、肩と爪先でブリッジを作るように腰を浮かし、受話器をそこに押し付けながら悶えている女。

呼び声

——ドラフトに寄りかかり、何かをま

🌀

まる。駄目だ、ここには捨てられない。封筒ごと丸めて作業着の上着のポケットにねじ込むと、理美は逃げるように更衣室を飛び出した。封筒をロッカーに置いておくことは、なぜか恐ろしくてできなかった。

廊下の角を曲がったとき、誰かにぶつかりかけた。「ごめんなさい、」視線を合わせること出来ず、おざなりな謝罪だけを置いて足早に進み続ける。

検査室のドアの前まで辿り着いた。ノブに手をかけて、

「水越さん」

背中からの声にびくりと振り返った。圭吾が立っていた。いつもの穏やかな笑顔は消え失せ、ただ感情のない顔だけがそこにあった。

「山根くん、」

言葉が途切れた。謝らなくちゃ、謝らなくちゃ——けれど唇は動かなかった。圭吾は目を逸らし、再び理美を見つめ、

たぐように膝を開け、クリーンウェアを付け根から足首まで濡らして肌にとびつたり貼り付かせた女。

「何!? どうしたの」

心臓が凍り付いた。悲鳴を聞きつけたのか、誰かが更衣室の外から声を投じている。

「な——何でもありません! そ、その、虫がいたから」

「あれ、水越ちゃん?」

まだこんなどこにいたの、と言いたげな怪訝な声。「って虫? 大丈夫、刺さるたりとかしてない?」

「だ——大丈夫です。その、もうどこかへ行ったから……ごめんなさい、騒がせて」

「ああ、何でもなければ良かった」

びつくりしたよ、水越ちゃん乙女だなあ——暢気な笑い声が聞こえた。「んじゃ。早く仕事に戻んなよ。怒られるぜ?」

「話があります。仕事が引けた後に、また」

低い声でそれだけ言い置くと、圭吾は理美の脇をすり抜け、検査室の中へ入っていった。

午後の仕事は上の空だった。

大きなミスも犯さずにいられたのが自分でも不思議だった。圭吾の言葉と卵の感触、そして下腹部の冷たさだけが、理美をぐるぐると苛んでいた。

終業のチャイムが鳴ると、理美は足早に更衣室へ駆け込んだ。

誰も来ていない内にロッカーを開け、作業着のズボンを脱ぎ、私服のスカートを着ける。今の下着の状態は誰にも見られなくなかった。

ひとまず安堵の息を吐き、上着に手をかける。はたと気付いてポケットに手を入れ——顔面が蒼白になった。

足音が遠ざかった。理美は安堵の息を吐き——恐怖がじわりと舞い戻った。

……この写真は、この写真は、この写真は……

女子更衣室の扉自体に鍵は設けられていない。ドアの前に目隠しの衝立が立てられていて、後は個人でロッカーを施錠するだけだ。ロッカーの扉の隙間に封筒を差しおく程度のこと、隙を覗けば男でも充分出来る。

だが、ここは会社の中だ。部外者がどうやって、この中に入ったかというのか?

……あの時も、隣の検査室の受話器からあの声が聞こえた。つい先程も、業務用PHSに掛かってきたばかりだ。まさか、まさか——

解らない、解らない。ただ一つ言えるのは、これを誰にも見られてはならないということだけだった。

ゴミ箱に捨てようとして慌てて思い留

無い。

昼休みの直後にここで見つけて、ポケットに丸めておいたはずの封筒と写真がどこにも無い。落としたのか? どこで? 思い出せない。午後は殆ど放心状態で、どこでどんな作業をしたのかさえ覚えていなかった。

丸めたままの状態だったから、誰かが拾ってもごみとしてそのまま捨ててくれているかも知れない。けれど、もしあれを誰かに見られたら、見られたら——

青ざめたまま上着を着替え、更衣室を出た。検査室に戻る。「あれ? 水越ちゃん忘れ物?」同僚の声に答える余裕もなく、床に目を這わせ、ごみ箱を覗き込む。しかし理美の願ひも空しく、丸めた封筒も上質紙も、どこにも見当たらなかった。

青ざめた顔のまま理美は廊下に出た。どうすれば、どうすれば、どうすれば

……頭の中に渦を卷いたままの理美の前にその時、誰かの影が立ち塞がった。

「——山根くん、」

「水越さん」

目をほんの少しだけ細めながら、圭吾が笑いとも無表情ともつかない形に唇を曲げていた。「じゃ、行きましようか」

「い、行くって」

「話がある。そう伝えましたよね」

肩に手が置かれた。身体が跳ねた。「水越さん、いつもバス通勤でしょう？ 今日を送りますよ。とりあえず駐車場まで」

※

助手席に身を沈め、夕闇に覆われた空を左手に見ながら、理美の心臓は静まらないままだった。

圭吾の匂いの染み付いた車内。右には当の本人が、静かな表情でハンドルを

握っている。

「蘇我の方でしたよね、水越さんの家」

「……うん」

会話が途切れる。会社を出てからずっとこの調子だ。奇妙な緊迫感が車内を漂っている。

けれど圭吾の方は、緊迫感などまるで感じている気配も無く、ずっと同じ調子でフロントガラスを見据えていた。

昼休みにあれほど手酷く突っ撥ねてしまったのに、今の圭吾は、そんな出来事など存在していないかのように静かだ。

圭吾の方を向いていられず、理美は膝に視線を落とした。冷たく貼り付いた下着の感触と、わずかに顔を出したままの卵の感覚がたまたまなくて、理美は硬く両手を握った。

——果てしないほど長い時間の後、理美のアパートに着いた。

お世辞にも綺麗とは言えないアパートを前に、圭吾は初めて、驚いたように目

もの圭吾じゃない。「どうしたの……ねえ、どうしたの？ お、お願い、落ち着いて——」

「水越さんこそ落ち着いて下さいよ」
圭吾の顔には薄笑いすら浮かんでいた。

「大丈夫です、水越さんの嫌がることはするつもりありませんから」
いつの間にかキッチンを過ぎ、和室の壁際まで追い詰められていた。理美の両肩を圭吾の手が掴む。

「だ、だめっ！」
昼間と同じように圭吾を振り払い、理美はドアに向かって走り出した。

腕を掴まれた。
あつという間に引きずり戻され、畳の上に押し倒される。両腕を背中に回され、紐のようなもので両手首を締め上げられた。

一瞬の出来事だった。理美は畳の上、芋虫のように後ろ手に縛り上げられていた。

を開いたが、また先程までの表情に戻る。助手席を出た理美の手を取った。

「や、山根くん？」

「部屋はどこらですか。一緒に行きましょう、もう暗いですし」

穏やかだが、有無を言わせない響きがあった。手を引かれるまま、理美は部屋番号を伝えるしかなかった。

扉の前まで辿り着くと、圭吾はようやく手を離した。

「——送ってくれて、ありがと」

理美は視線を落としながら、「それと、その……昼間は、ごめんなさい。山根くんのこと、嫌いなわけじゃないの。ただ、ちょっと、驚いただけ——だから、気にしてたら、ごめんね」

駆られるように紡いだ謝罪の言葉は、しかし理美自身の耳にも、とって付けた言い訳にしか聞こえなかった。

応えは無かった。「……それじゃ、お休みなさい」背中を向け、鍵を開け、扉

「い、いや——いやあっ！」

絶叫が漏れた。「山根くん、何するの!? お願ひ、解いて。こんな事しないで！」

「嘘言わないでくださいよ。好きなくせに」
「——え!？」

圭吾が何を言っているのか理解できなかった。「す、好きって」
圭吾は答えなかった。理美をうつ伏せに倒したまま今度は右足を掴む。靴下を

脱がされ、足首に何かを巻かれた。靴下が上に引っ張り上げられる。スカートが付け根近くまでまくれ上がる。「いや、いやっ」圭吾は理美の右足に巻いたコードの端を引っ張り上げ、窓のカーテンのレールに潜らせると、硬く結わえた。

理美は両手を背中に戒められたまま、右足を高く上げた状態で拘束されていた。

「や、山根くん! いや、こ、こんなのいやっ! 解いて、解いてっ!」

「山根くん……山根くん!」
声が震える。おかしい。こんなのいつ

「静かにしてください水越さん——まあ、どうせ叫んでも無駄ですけど」

「どうして!? どうしてこんなことするの!?! ひどい、山根くんがこんなひどいなんて、思わなかった!」

——瞬間、圭吾の顔が、能面を被るようにならなくなった。

「こっちの台詞ですよ、それは」

「え」

圭吾は上着のポケットに手を入れ、それを取り出すと、理美の前に広げた。

混乱と暗がりの中、理美は目を凝らし——喉の奥で悲鳴を挙げた。

あの写真だった。

昼休みの後、更衣室のロッカーに残されていた写真。作業着のポケットに丸め入れた後、無くしてしまっていた写真。

昨夜の検査室での理美の痴態を写し撮った、決して誰にも見られてはならない写真。

どうして、どうして、どうして!?!

呼び声

台所のごみ箱に捨てたはずのそれが今、圭吾の手に握られている。

下半分は裂かれていて、脅迫文の部分は残っていなかった。捨てる時に自分が破いたことを、今更ながら理美は思い出した。

「そ、それは……それは……」

「さっさと言えよ!」

眼前に包丁が突き付けられた。

「やあっ! やめて……」

泣きじゃくりながら、理美は告白した。

「そ……そのときだけ……そのときだけのっ……ずっと、我慢して……でも……どうしても、我慢、できなくて……それを……誰かに、撮られて……それで、それで……」

「誰が撮ったんです」

「そ、そんなの……解るわけ、」

「どこから撮ったんですか、これ」

「——え」

「これもそうです」

どうして圭吾が持っているの……圭吾にだけは、圭吾にだけは絶対知られてはいけなかったのに、どうして!?!

「……信じてたのに」

圭吾の声色が変わった。玩具を取り上げられた子供のような涙声だった。「水越さんは違うって、ずっと信じてたのに。信じてたのに——」

「ち、違うの! それは、その、それは、」

「黙れ! この売女!」

今度は左足を掴まれた。凄まじい力で脚が裂かれる。右足と同じように靴下を脱がされ、足首に延長コードを巻かれる。そして今度は部屋の反対側、衣装戸棚のハンガー掛けに、コードの端を縛り付けられた。

スカートは完全にまくれ上がり、右足を高くと上げ、左足も畳から浮かせ、理美は両脚を大きく割り裂かれた格好を圭吾の前に晒していた。

圭吾は屈み込むと、浴室の写真を畳に置き、代わりに検査室の写真の方を拾い上げ、理美の前にちらつかせた。「誰が、どこから、こんな写真を撮れたんですか」

「……っ、知らない、知らない……」
必死に首を振る。圭吾は写真の印刷された紙を放り捨てると、空いた片手を理美の脚のあわいに伸ばし、触れた。

「あっ!」

「何だ。びっしょりじゃないですか」

まだ湿ったままの下着を圭吾の指が撫でさする。「いつもこんなに、透けるほど濡らしてるんですか?」

圭吾の卑猥な言葉と、もどかしいほどゆったりした指使いが、理美を錯乱に陥れる。

「やあっ……やめて……やめて……」

圭吾の指が下着越しに唇の間を滑った。背中がのけぞる。卵の硬い感触に気付いたのか、圭吾の片眉が上がった。

「いや、いや、いやあっ!」

首を振りたてて泣き叫ぶ。圭吾は理美を一瞥すると、踵を返してキッチン奥へ消えた。

何かを漁る音がする。

不気味な数十秒の間の後、圭吾は戻ってきた。右手には——包丁が握られている。

「いや、やめて、やめて……殺さないで……殺さないで……!」

「大丈夫。そんな事しませんよ」

圭吾の声がさらに豹変していた。恐ろしいほどに沈着な声。「それより水越さん。いつからこんなことしてたんです」

圭吾の左手に広げられた一枚の紙を見て、理美は再び奈落に突き落とされた。

浴室のあの写真だった。

今朝、郵便受けに放り込まれていた脅迫状の写真。もう一つの見られてはならない写真。全ての始まりとなった、浴室での行為の写真。

「何ですか、これ?」

卵が顔を出している部分を中心に、圭吾の指が何度も往復する。

「そ……それ、それは……その、」
「はっきり言って下さいよ。仕方ないなあ」

圭吾は薄笑いを浮かべると、包丁の先端を下着に近づけた。理美は蒼白になった。

「いや! いや! いやあ!」

「動かないで下さい。怪我しますよ」

包丁の先端が下着の生地を刺さり、柔肌に触れるか触れないかの位置でゆっくりと縦に下ろされる。下着が切れ込みから左右に裂け、叢と、その奥の薄紅色の唇が顔を覗かせた。

冷ややかな空気が流れ込む。

「……ああ……」

見ないで、見ないで、見ないで……

「匂いますよ、水越さん」

「いやあっ!」

全身の血が一気に顔に上った。

圭吾の指が下着をつまみ、左右に引張った。裂け目が広がる。その間を通して指が叢の奥に伸び、唇を大きく開けた。

「あ——」

冷気がさらに奥に忍び込んだ。開かれたまま指の一本を中に突き込まれる。悲鳴が漏れた。卵が掻き出され、畳の上に糸を引いて落ちた。

「いつも入れてるんですか。そんなにいつも、中に入れてもらわないと我慢できないんですか？」

「い、いつもじゃ……いつもじゃないの……今日だけ……今日だけなの……そうしろって、そうしろって、言われたから……お願い……信じて……」

「へえ」

寒気がするほど冷たい声で圭吾が笑った。立ち上がり、部屋の隅に置かれたプラスチックの収納ケースの前に歩み寄る。何かを漁る音。振り返ると、圭吾は片

呼び声

理美の感覚を揺さぶるように、けたたましい音を響かせる。

「や……山根くん、山根くん、」
朦朧となりかけた意識の中、必死に口を開く。「電話が……電話が、鳴ってるの……だから……やめて、お願い……出させて……電話に、出させて……」

「電話？ 何言ってるんですか？」
眉を顰めながら、圭吾は破かれた下着の前に顔を近付けた。「……まあいいです。たっぷり楽しませてあげますよ、いつもご自分でしてたように」

叢を揺らす圭吾の吐息が恥ずかしくて、必死に腰を揺する。けれど両脚を拘束するコードは固く、引張ってもかすかに伸びるだけで、理美の脚はびくりとしか動いてくれなかった。

突然、滑らかで熱いものが理美の中心を滑った。

「あああ——」

手に小箱を乗せて戻って来た。「じゃあ、これは何ですか」

表面に凹凸の付いた、長さ二〇センチほどの、先の丸いピンク色の筒。

「——それは、」

「これは？」
少し細めの、数珠球が繋がったような細い棒。

「……」

「これは何です」
さっきまで入れていたものより一回り半ほど大きな、コードとりモコンの付いた楕円形の卵。

「……それは、それは……」

「それじゃ、これは？」

ハンドクリームのような丸い容器。蓋は圭吾の手で開けられ、中の軟膏が見える。

「ち、違うの、違うの……勝手に、勝手に送られてきて……使えって……それで、」

「嘘を吐くな！」

脚の間に包丁が突き立てられた。理美は悲鳴を挙げた。「楽しんでたんらう。こんな道具を使って、毎晩毎晩腰を振ってわめき散らしていたらどう！」

「ち、違っ……」

「——違う。——
違わないじゃないか。圭吾の言う通りじゃないか。

自分は毎晩何をしていた？ 部屋でひとり何も着けなくて、道具を入れて、出し入れて、その上薬まで塗って、そして——

電話越しに、受話器に向かって、彼、彼、彼に向かって、はしたない叫び声を聞かせて——

——電話が鳴った。

部屋の反対側の隅、畳の上に置かれた旧式の黒い電話機の呼鈴が。

朽ち果てた漆喰のように、表面からぼろぼろと剥げ落ちていく。

……なぜだろう。
どうして、こんなことをしてるんだろう。

……まだ、鳴ってる。
でんわが鳴ってる。

はやく、出なくちゃ。でんわにでなくちゃ。

……でんわの向こうで、ずっと待ってる。ずっと待ってる……

——縄が解けていた。

桃色の玩具の動きは、いつの間にか圭吾自身の律動に変わっていた。

手が圭吾の背中を掻き走り、脚は圭吾の腰に絡み付いている。服は全て剥ぎ取られ、胸の突起が圭吾の肌に擦られている。



喉から紡ぎ出される喘ぎの中、呼出音が遠くに響いていた。

……電話に、出なきや。

……はやく、出なきや。

片手の力が抜け、圭吾の背中を離れる。指先が、畳に転がったままの包丁の柄に触れた。

圭吾の動きが激しさを増す。

……でなきや。

片手がゆっくと、包丁の柄を握っていた。

……でんわに、でなきや……

——そして、

圭吾が一番深く入り込み、解き放った

とき、

理美も最も深く迎え入れ、

圭吾の背に刃を突き立てていた。

電話の音が止まり——
数秒後、再び鳴り始めた。

※

……電話は鳴り続けている。

動かなくなった圭吾の身体の下から、

理美はのろのろと這い出る。

数珠状の細い棒と、コードの付いた卵、

そして丸い容器を拾い上げ、部屋の隅の

電話機に向かう。

受話器を掴み、耳に押し当てながら、

理美は棒と卵の表面に軟膏を塗り始める。

恍惚の表情を浮かべ、うつぶせに寝そ

べり、腰を高く突き上げ、卵を前に沈め、

棒を後ろに差し込む。

そして卵のスイッチを入れ、後ろの棒

を激しく、前後に出し入れし始めた。

「いや……だめ……。そんなこと、させないで……」

——山根くん——

【了】

